
マル秘!!学園生活ッ

乃亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マル秘！！学園生活ッ

【Nコード】

N8975I

【作者名】

乃亜

【あらすじ】

天使学園の風紀委員。小川乃亜が繰り広げるアクション学園ストーリー！！

天使学園に降りかかる災難や立ちはだかる大きな壁を乃亜の特殊能力で解決していきます。

1、おーぷにんぐッ（前書き）

あまり小説を書いたことはないので、文章構成などがおかしいかと思いますが、読んでくださるとうれしいですッ！！

1、おーぷにんぐッ

『起床時間です。寮生の皆さんは直ちに起きなさい。』

「ふわぁ……。」

とある寮内に生徒の睡眠を妨げる放送が突然流れた。

時刻は午前6時。

1人の少女が目覚めた。

名は、小川乃亜。

「制服…制服……。」

ベッドからずり落ちた少女の服装は…何も無い。

何も着ていないのだ。

「乃亜……！！！！！！！！！！」

彼女の名を呼ぶとともに突然部屋のドアが開いた。

「ぬぁッ！？」

そして、驚きの声が飛んだ。

「…裸??」

入ってきたのはとても美しい少女だった。

少女の名は七瀬留美。

「会長！！突然入ってこないでくださいッ」

乃亜は毛布で前を隠して言う。

そう。七瀬留美はここ、天使「あまつか」学園の生徒会長なのだ。

「なんで敬語なのよッ！？同い年でしょあ??」

「し、しかし…。わ、私はあくまで会長の補佐ですからあ！！」

乃亜は顔を赤らめて言う。

それを見て留美はニイツと笑って言う。

「まあ、いいわ！！補佐というのなら、早く着替えなさい」

「着替えるのはめんどくさいですよ…。」

そう言ったと思ったら乃亜の体が急に輝きだした。

フツと微笑みつつ眺める留美。

まるでそれが当然かのように…。

突然、輝きがおさまった。

そして光の中から現れた乃亜は制服になっていた。

なんとその間、15秒。

「相変わらず、早い着替えね…。」

留美が意地悪そうに言う。

「ですから、着替えじゃありませんってばッ！！」

「じゃあ…変身??」

「どちらかと言えば…。」

乃亜は生まれつき奇怪な能力を持っていた。

それは、自らの細胞を変化させるもの。

ケガをしても乃亜の意志ですぐに治る。

表面の細胞を制服など、洋服に変えることも可能だ。

しかし、そんな乃亜を親は怖がり捨てた。

そんな乃亜を七瀬留美の家族が拾ったのだ。

乃亜の家族は乃亜が生きていることすら知らないだろう。

乃亜自身も家族の顔を覚えていない。

「あなたは私の補佐なんかじゃないわッ！！」

自身満々の表情で留美が言う。

「最高の家族で最高のボディガードよ！！」

『緊急事態発生！！緊急事態発生！！寮生はただちに各自指定され

た避難所へ集合！！』

1、おーぷにんぐッ(後書き)

読んでくださりありがとうございました。
感想などがありましたらお願いします。

次回もがんばるのでよろしくお願いします。

2、緊急事態発生！！（前書き）

やっと2話目です。

更新が遅くてすいません 汗

ぜひ、読んでやってください。

2、緊急事態発生！！

『緊急事態発生！緊急事態発生！生徒は直ちに避難所へ集合せよ』

突如、学園内にサイレンが響き渡った。

それを聞いた乃亜は留美を無言で見つめた。

それに答えるように留美は深く頷いた。

乃亜は留美の頷きを合図のように部屋を飛び出していった。

乃亜はサイレンの原因のもとへと向かった。

しかし、逃げ惑う生徒が邪魔でなかなか前へ進めない。

「ちよつと、みんな落ち着いてツ！！」

乃亜が叫んだ。

でも、生徒達は聞く耳を持たない。

突然、乃亜の体が輝きだした。

すぐに輝きは納まり乃亜は鋭い眼光を走らせた。

「その場でストーーーップ！！！！！！」

ものすごい音量だった。

声帯の細胞を作り変えたのだ。

乃亜のすぐそばにいた生徒達はフラついたりするものもいた。

何はともあれ、生徒達はその場で止まった。

「よし！！」

乃亜はみんなが止まったので満足したようだ。

「みんな、聞いて！！そんなに慌てていては余計に遅くなってしまいます。並んで小走りで行きなさい。」

乃亜の一言でみんなは並びだし、適切な非難をしだした。

乃亜はまた、サイレンのもとへと走り出した。

乃亜は特殊な能力をもっているため、緊急時にその原因をつぶすと

いう仕事があるのだ。

「原因は誘拐犯だぜ??」

突然、横から声が聞こえた。

「早いですね。雄也。」

「まあ、俺は道を作れるからな。」

この男は松中雄也。乃亜と同じ特殊能力者だ。

しかし、乃亜とは違い、壁などの障害物を通り抜ける能力だ。

「誘拐犯??誰を狙ってるのですか?」

「留美会長だよ。お前は急いで誘拐犯のところへ行け!!俺は会長のとこへ行く。」

「わかりました。会長はお任せします。」

そういつて2人はお互い反対の方向へと走り出した。

「生徒会長を呼べッ!!じゃなきゃ、このセン公を殺るぞ!!」

「待ちなさい。私が相手をしませ。私に勝てたら会長を呼びましよう。」

乃亜は誘拐犯のもとへたどり着いたようだ。

しかし、誘拐犯は学園の教師を3人人質としている。

「わかった!!しっかし、こんなでけえー学園の警備員がこんな可愛い子だとはなあ!??」

そういつて、誘拐犯は乃亜に向かって走り出した。

そして、犯人の手にはナイフ。

「……っ!!」

乃亜は犯人が振り上げたナイフを片手で受け止めた。

いくら特殊能力を持っていて傷が一瞬で治るとはいえ痛みは普通に感じる。

乃亜は痛みを顔がゆがめた。

痛みを耐えつつ、空いている手で犯人をつかみ、投げた。

「うわあ!!!」

犯人も驚いたようだ。

そして、きれいに投げ技が決まった。

乃亜は犯人のナイフを奪い、犯人の喉下にナイフをつきつけ、言った。

「あなたは負けました。会長は呼び出しません。あきらめてください。」

「……それはどうかなッ!？」

犯人は乃亜を思い切り蹴飛ばした。

「キャッ!？」

小さく叫び吹き飛ばす乃亜。

そして、壁に頭を打ちつけ気絶してしまった。

「勝ったぜ!! 会長を呼べー!ー!ー!!」

2、緊急事態発生！！（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

よろしければ、評価や感想などお願いします。

次回もよろしくお願いします。

3、仲間（前書き）

相変わらずの更新の遅さ…。
本当にすいません 汗

3、仲間

「そうはいかないからー。」

犯人の横からとても緊急事態とは思えないようなのんきな声がした。

「なっ!?!」

犯人は驚いて自分の周りをきよるきよると見回す。

しかし、周りには誰もいない。

もちろん乃亜は壁でぐったりしたままだ。

「乃亜を痛みつけたアンタは見逃せないなあ。」

その声と同時に天井から美がつくほどの少女が突っ込んできた。

「だ、誰だ!?!」

犯人は問う。

「自分の名は爛沢空。ちなみに特殊能力者だからー。」

空は全然緊張していない。

むしろ、楽しんでいるようだった。

「おまえもか:。」

犯人はあきれたようだった。

(この学園は能力者だらけなのか??)

というように:。

「おまえも:。って3人だけだっツーの。」

空の横から雄也が現れた。

「雄也。フィールドをよろしく!?!」

「了解。」

雄也の体が輝きだした。

「半径100m。高さ15m。発動!?!」

雄也が叫んだと同時。

空と犯人の体が黒い球体に包まれ消えた。

雄也は道を作るだけでなく、
空間を生み出すこともできるのだ。

「うわあっ!?!」

驚く犯人とは裏腹に妙に落ち着いてる空。
パンッ

と軽やかな音とともに球体のはじけた。

「じゃあ、戦闘といこうか…。」

空の顔は笑っていた。

「はあー!?!」

気合一声。

空の手が輝く。

突如、空の輝く右手には太刀が握られていた。

「い、いつのまに!?!」

「今さつき、ちよつとね」

空の能力は乃亜とも雄也とも違う。

意のままに瞬間移動をさせられるのだ。

太刀はその能力により、学園の武器庫から瞬間移動させたものだった。

次の瞬間。

決着はついた。

空が瞬間移動をして犯人のすぐそばに行き、首筋に太刀を構えたのだ。

「はい、おわり それとも、このままスツといっちゃう?」

「…!?!」

犯人は脅えて声は出ない。

空の目が本気なのだ。

「空!?!そこまです。」

雄也と乃亜が現れた。

「あ、乃亜！もう、目が覚めたの??」

「すみません。油断しました。」

乃亜の目は涙ではなく、犯人に対しての憎しみがたまっていた。

「犯人！いい加減にしてください。警察になんて連れて行きませんから。」

「え…!??」

犯人の目は一瞬期待が横切ったが、すぐに希望は捨てられた。

乃亜の顔は笑っているのに、目がまったく笑っていなかったからだ。

「一生ここにいてください。」

乃亜のその声が合図かのように乃亜、雄也、空の3人の体を黒い球体が包み込んだ。

そして、消えた。

「あ…」

もとの空間にたどり着いたとき、乃亜が倒れてしまった。

「ちよ、大丈夫!??」

そこには留美。

「大丈夫だと思います。軽い脳震盪じゃないかと…。」

雄也が言う。

「なら、いいけど…。それにしても、お疲れ様でした!!!」

「いえ、これが俺らの存在意義ですから…。」

そういつて、雄也と空は哀しく笑った。

3、仲間（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
今後もよろしくお願いします。

4、鈴神学園生徒会長（前書き）

今回も遅くてすみません。

文章表現が苦手なものでして…。

早く書けるような努力をしたいと思います。

4、鈴神学園生徒会長

事件も無事解決したと思われた。

しかし、突如、雄也と空の前に1人の女性が現れた。

「誰?? あんた。」

空が冷たく聞いた。

しかし、女性は何も聞こえなかったかのように乃亜に歩み寄る。

そして乃亜の額に手を触れようとした。

しかし、

「触んなっ!! 誰ですか!??」

それを雄也が防いだ。

また無視をするかと思ったが違った。

「さつきからうるさいのう。御主ら誰に向こうて口をきいとる。」

「知らないっつーの!! あんたが名乗らないからでしょ!??」

なんと女性は不思議な言葉遣いで返してきた。

負けじと空も反抗する。

「それはすまなかった。私は鈴神学園の生徒会長、沢森亜衣羅だ。」

「……!??」

鈴神学園とは。

この学園とほぼ同時に建てられ今までいろいろな場面で協力してきた。

しかし、現生徒会長になってからは交流が一切断たれていた。目の前にいるこの人こそ、その現生徒会長なのだ。

「そんな方が何のためにわざわざここまで??」
雄也が聞いた。

「留美さんと呼んでくる!!」
空が行こうとしたとき、

「かまわん!!」
亜衣羅の強い声で空がひるんだ。

「それには及ばぬ。私はアイツなんぞに興味はない。」
亜衣羅は堂々と言う。

しかし、それには乃亜が黙っていないかった。

「会長をアイツなど…何様のつもりですか!？」

「乃亜…!!まだ起きてはダメだ。」

起きかけた乃亜の体を空が優しく止める。

それを見た亜衣羅が微笑んだ。

「ようやく目を覚ましたか乃亜。そう。私は御主に用があつてきたのだ。」

「私に…?」

フツと亜衣羅が笑った。

「そうだ。御主を我が鈴神学園に編入させるために来たのだ!!」
その亜衣羅の顔はなんとも黒く怖いものだった。

4、鈴神学園生徒会長（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次回もよろしくお願いします。

見えるもの(前書き)

更新が遅すぎてすみません。

どうか、読んでやってください^^

見えるもの

「私を鈴神学園に…！？何が目的ですか？？」

乃亜は冷たく言い放った。

「御主は相変わらず心が冷たいのう。」

亜衣羅はなぜか余裕の態度。

「相変わらず…って2人はお知り合いなんですか！？」

雄也がハツと気づいて言った。

「そうですね。」

そこにはいつの間にか留美の姿があった。

「か、会長…。どうということですかっ！？」

空はかなり動揺していた。

何かを察していたのだろうか…。

「最近、頻繁に不審者がこの学園内で目撃されているでしょう？でも、誰も捕まえられないでしょ…。

それは、その不審者も特殊能力者なの、鈴神学園の…！！

乃亜はもう、何度か戦っているの。」

留美は一気に言った。

「ほう…。さすがは会長様。もう、わかっておるようだな！！」

亜衣羅は声高く、まるで何かの開始の合図のように叫び、続けた。

「そう。この学園内にはすでに我が鈴神学園の選りすぐりの特殊能力者を3人ほど潜入させておる。

みな、能力は爆破。

乃亜…！御主が鈴神学園への編入を断る場合はどうなるか…わかっておろう？」

亜衣羅はとても愉快そうに笑った。

その瞬間、誰もが亜衣羅の勝利を感じた。

「フツ…。別にかまいませんよ。こんな学園…。」
乃亜だけは違った。

「なっ!?!」

空気が凍りついた。

「おまえっ!!裏切るといふのか!?!」

亜衣羅はかなり動揺している。

「裏切る??はっ!笑わせませぬ…。」

「おいおい…。壊れちまったのかよ…。」

雄也が乃亜の反応に軽く怒っているようだった。

「ハハッ!!ほうら乃亜…。次々とおまえのもとから大切なものが

無くなつていくぞお!?!」

亜衣羅はまた余裕の態度をとった。

「なくなりはしません!!」

「っ!?!」

その場にいる者が驚きの声を上げる。

「確かにこの学園は大切です。私の家です。」

少し間が空く。

「しかし、何よりも大切なのは家族…この学園のみんな、仲間です

!?!」

「だ、だったら!?!…」

空が耐え切れず口を挟む。

しかし、乃亜は空がいい終わる前に続けた。

「学園が、家がなかるうが家族は家族!!仲間仲間です。」

そのときの乃亜の表情はとても輝いていた。

「っ!?!いいのか…。本当に。学園を消すぞ!?!」

「どうぞ、ご自由に。しかし、あなたの周りには何もなくなるでし
よっ。」

私が消してしまうので…。」

乃亜は微笑んだ。

「ふざけるな！！ふざけるな…ふざけるな……！！」
だんだん亜衣羅の声は小さくなっていった。

「そんなのは虚勢だ！！信じられるものは見えるものだけだ！！！！！！！！！！」

「あなたはさぞ不安だったのでしょう。しかし、人を巻き込むなんてしてはいけないことです。

もう、こんなことは絶対にしないでください。」

「約束すると思うか！？……っ！？」

乃亜は黙って亜衣羅の両手を優しく握った。

しかし、亜衣羅はその手を無理やり振り払った。

「えっ！？」

その場にいる者がみな不安に、怒りに襲われた。が、

「撤退…撤退だっ！！！！」

「亜衣羅さん…。」

留美が笑顔で言った。

「勘違いするな！乃亜に対する興味を失ったまで…。」

まあ、こんな学園には2度とこないがな！！」

亜衣羅は照れながら言い、去っていった。

見えるもの（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
このシリーズはこれで終わりになります。

他のモノもぜひ、読んでやっってください^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8975i/>

マル秘!!学園生活ッ

2011年1月13日17時44分発行